

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別取扱承認証第六二七号  
平成二十五年六月一日発行(第百十六卷第六号)

# ホトトギス

六月号



## 俳句随想 〔三百七十二〕

汀子

たった十七文字によつて表現しなければならぬ俳句には、その短い中で多くのことを読者に伝え共感して頂くことが大切である。出来るだけ簡単に述べ、適切な表現をあれこれ模索し、自分が言いたい思いがましまつて納まるとしめた！と思う。その表現は既に言い古されている言葉でも、自分で見つけた表現であれば勿論いいのである。しかし、効果的な表現の中には、もう使い古されたものもある。例えば「何事も無かりし如く……」というのには、点線に季題はどれでもびつたり嵌まつて名句になる。「昨日とはうつつて変りし……」もよくある表現である。俳句は短い詩です。効果的な表現があることはあつてもそれが思はず自分で発見して作ったのであつても、それは自分の句帳だけに仕舞つて置いて頂きたい。もっと色々幅広く表現して名句を作つて行きたいものである。

投句して字を間違えたので消した後、そこへ字を入れない句稿がある。どうぞ忘れないで書き入れて頂きたい。病後のことを予後と使うのは間違ひであると言申し上げたが、これは「病後を予測する」という医学用語と聞いた。「欠方の」は光の枕詞。「冷える」だけでは季題にはならない。「冷やか」「秋冷」としてほしい。

旬日記 汀子

平成二十四年六月二日 芹屋ホトギス会

蝙蝠に命つなぎし戦あり  
明易きこと早発ちとなる一日  
更衣せめて身軽に旅立ちぬ

六月三日 下萌句会

パソコンの灯を取りに来し羽音あり  
葉隠れといふかくれみの梅は実に  
徹の香の中に整理のはかどらず  
冷房を入れて広間の二十名  
徹といふ捨てる言訳ありにけり

六月四日 ロイヤル俳壇

鈴蘭の野に郷愁の旅路置く  
黒南風にふと童巻を怖れけり  
指先の荒るるをいとひ草取らず  
鈴蘭の束小さくとも香にまみれ  
シャンデリア星を集めし涼しさよ

六月八日 綿業倶楽部

アイリスの野に近道のあることを  
快晴の家居旅路の五月雨るる  
五月雨の予報聞きつつ旅支度  
水音に誘はれ出でし蛩かな

六月九日 北近畿ホトギス俳句大会前日句会

青空も梅雨雲も旅彩れる  
しばらくは栗の花咲く峠道  
金星のよぎる太陽見て梅雨入り  
まぬがれぬ梅雨入りの旅路なりしこと  
さつと降りさつと上るも山の梅雨  
すぐ止みて卯の花腐しとも云へず

六月十日 北近畿ホトギス俳句大会

梅雨雲の変幻自在日を零す  
蹤いて来し梅雨雲よりも早く着く  
二三言交す言葉の涼しさよ

六月十日 大阪倶楽部

雨霽に紛れぬ推の花の香よ  
雨蛙かしこまりたる雨催  
又忘れさうなる電話明易し  
電の音とは気づかざる五六人  
どこまでも丹波の山路椎の花  
追ひ越して行きし山路椎の花  
電予報ありしが出掛けねばならぬ

六月十二日 綿業倶楽部

畠から抜きて下げ米し夏大根  
山間の田植も済んでをりしこと  
夏霧の消えぬし山路帰路として

六月十四日 清交社

みよし野の旅はや遠し水馬  
快晴の旅願はずも梅雨に入る  
あぢさゐに郷愁の色置き初むる  
あぢさゐの色に記憶を巻き戻す  
梅雨入りせしことを忘れて旅二日  
山荘の季節はじまる七変化

六月十六日 東海ホトギス同人会

遺墨見る充福の時間とは涼し  
なつかしき遺墨に梅雨の雨宿り  
梅雨逃れ梅雨に追はるる旅路とも  
涼よ 涼 五月 月 闇  
二時間の梅雨憂しとせぬ伊賀の旅

六月十七日 東海ホトギス俳句大会

夏草を踏みて出来たる句碑の径  
邂逅の句碑へ夏草踏み分けて  
梅雨雲の東へ移りつつありぬ  
時鳥啼き継ぐ静寂共有す  
時鳥啼いて記憶に辿り着く

六月十八日 アサヒカルチャー

旅と旅はざまの家居梅雨の晴  
時鳥聞きたる旅をふり返る  
梅雨に入り晴は得したやうな旅  
六月十九日 有恒俳句会  
警報を聞きては眠り明易き

六月十九日 無名会

庭の蚊をへだつて玻璃戸を不用意に  
六月二十日 時雨句会  
再手術覚悟とのひ五月雨るる  
傷癒けり日も近からむ七変化

六月二十八日 さくらぎ会

再手術名医にゆだね露涼し  
露涼し熱く語りし日は遠し  
予定皆キャンセルとなる梅雨の怪我  
六月二十九日 秋泉先生へ  
若者の道は一筋泉汲む

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十四年六月一日 カトリック新聞選者時

暮の春ミサへ急ぎし男坂  
六月二日 芦屋ホトトギス会  
実梅落つ眉山に御返しつづ  
都心にも闇を引き寄せ蚊食鳥  
タイガースにも更衣ころもがへ

六月三日 野分会菅原例会

明易や昨日の酒の抜けぬまま  
明易や今夜は帰つたらあかん  
代掻いて日本の夜明迎へし日  
夏場所を振り返りたる二人かな  
六月七日 蕉心会

ラーメンはやつぱちちよつと汗かくで  
クラクシオン涼しく響く鉄の橋  
釣堀のやうにおつさん集まれり  
遊船の傾きにある景気かな  
白服の見せびらかしてゐる釣果  
小判草値下りしたる丈であり  
さういへば夏帽被つたことない  
白く来て館の蚊赤く飛び立てり

六月八日 六甲会

この家のことは守宮が知つてゐる  
腹見せて窓に親しき守宮かな  
田搔牛都心の端の一枚田  
代掻いて日出づる国に祈りあり  
岐阜羽島駅通過代掻いてをり

ホトトギス主宰守宮を友として  
六月八日 虚子記念文学館投句  
笑顔ある家には守宮よく似合ふ

六月九日 北近畿ホトトギス俳句大会

夏炬焚く上座下座もなし円居  
涼しさや蕪村の裔といふ佳人  
水の色泳ぎたくなるほど綺麗  
投票を終へて涼しき幹事かな  
六月十一日 朝日カルチャー若草句会

オリブの花二十四の瞳中  
めらめらとめらめらと金魚の尾  
河骨の崩れ品格そのままに  
島の朝花オリブに動き初む  
卓上に金魚を飾る佳人かな  
六月十四日 土筆会

蝙蝠に不夜城時を刻まざる  
十葉やいつもの猫の居らざりし  
オフィス街半旗掲げて五月闇  
六月十六日 伊賀芭蕉記念館贈答句

六月十六日 伊賀芭蕉記念館贈答句

汀子句碑文字の薄れて時鳥  
六月十六日 東海ホトトギス同人会 大会  
七変化忍者になりたかつた僕  
汀子句碑間違へもして時鳥  
時鳥聞くより歩幅自づから  
梅雨晴にいよいよ白き天守閣

六月十九日 草木瓜会

一匹の蟻に翻弄されし家  
列作る蟻に都会といふ修羅場  
杜若やつぱり忘れられぬ君

昔日を愛しむ色の杜若  
濃き色へ水は饒舌杜若  
杜若水に映せし気品かな  
六月二十一日 登高会

今日夏至と思へぬほどの陽気かな  
一滴に傾いてゆく額の花  
五センチの電フェラーリを直撃す  
夏至の句座君の笑顔があればこそ  
日を弾くことなく額の花崩れ  
電降つて都心を白く塗り替へる

六月二十六日 若水句会

誘蛾灯ぱちと地獄の一丁目  
花菖蒲紫がちの寺院かな  
紫は白従へて花菖蒲  
コロラトウーラソプラノ競ふ河鹿かな  
手作りの短冊配る涼しさよ

六月二十七日 目黒学園句会

さくらんぼ山気を甘くしてをりぬ  
水見舞水は生活の大都会  
子等の声戻りし村へ水見舞  
水見舞恙の人を思ひつつ

六月二十九日 野分会東京例会

短夜を使ひ切つたる手術かな  
明易や隣に寝てる君は誰  
明易や病窓に見る神戸の灯  
代掻いて水嘘つぽくなりにけり

六月三十日 ホトトギス社句会

竹落葉百幹といふどよめきに  
竹落葉佳人にばかり降り注ぐ

# 雑詠

## 廣太郎 選

恒例の庭の焚火に揃ふ顔 芦屋 小田ひろ  
 焼諸や燠にうづめて待つ時間 同  
 遺影へと十八歳を足す寒さ 同  
 風花の約束 四条河原町 神戸 山田佳乃  
 著ぶくれて恋の駆け引きとはをかし 同  
 鸞替へて人の掌ばかり見て 同  
 波音の中より生るる初御空 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 初御空先づありてより海のあり 同  
 寒菊の褪せることなき月日あり 同  
 襖また動かさず雪を卸さねば 長岡 安原 葉  
 雪卸す音にも雨の重さかな 同  
 堂暗く廊なほ暗し寺深雪 同  
 降る雪に偲ぶ人ある秋田かな 神戸 藤井啓子  
 角巻の瞳が旅人に笑ひくれ 同  
 星が降り来てかまくらに灯をとます 同  
 梅の咲く熱海桜は既に咲き 熱海 嶋田一歩  
 改めて空青きこと梅の咲く 同  
 大島のはつきりと見え梅日和 同

聳えぬるものを赦さぬ虎落雷 福山 竹下陶子  
 風花の天鼓の舞を描きそめし 同  
 冬虹の消えし心にホ句の虹 同  
 黒鍵といふ闇に触れ春を待つ 神戸 立村霜衣  
 せめぎ合ふこと春水のさだめとし 同  
 海遠く見て梅林の風にある 同  
 冬帝の闊歩してある隅田川 東京 橋本くに彦  
 悴みて旗もたらりとバスガイド 同  
 星むすぶ線もうたかた春隣 同  
 ぶつからぬ木の芽の勢ぶつかりぬ 香川 湯川 雅  
 凍つる夜は音なき闇に抱かれ寝る 同  
 寒月に射貫かれし身の固まりぬ 同  
 昼月を放り初富士なりしかな 東京 河野美奇  
 初富士に対してをれば静ごころ 同  
 日表の風みち日裏霜の径 同  
 早春の眉月沈みゆくところ 同 今井千鶴子  
 早春の星のかげらの降りし夜 同  
 早春の星降る地球雪が舞ふ 同  
 富士よりの風冴え伊豆の一の宮 同 大久保白村  
 万葉の森平成の冬の草 同  
 星を観に出て雪女連れ戻る 同  
 風の辻より寒行のあらはるる 熊本 岩岡中正  
 初句会新幹線で来られけり 同  
 マスク外して挨拶に来られけり 同

# 雑詠句評（四月号より）

眞理子・静龍・葉

憲明・とほ歩・むつみ

千鶴子・保佳・中正

美奇・廣太郎

## わが未来開く手術や冬紅葉 福山 竹下陶子

「わが未来開く手術」に、はつとさせられる。「手術」というとどうしても不安が先立ってしまうものであるが、前向きに我と我が身を引き立たせようとする思いが伝わってくる。時雨にあい霜にあたり冬なお色濃く残る紅葉の強さ美しさが、一句の余情となつて胸を打つ。（眞理子）

大きな手術をされた作者である。御高齢で受けられる手術はさぞお大変であろうと、想像するに余りあるが、未来へ向かつて又歩まれる希望に満ちた姿が見て取れる。最近都心でも「冬紅葉」はよく見る事が出来るが、寒い時期に燃えているその生命力と重なり合つて、力強い句となつている。（廣太郎）

## み言葉のやうに雪降るチャペルかな 熊本 岩岡中正

思わぬ雪のちらつく朝を迎えている。作者の住まいする地方での雪は、雪国に降る雪とは自ずと降り方や積雪量にも違いがあり、雪が降ること事態が大変珍しい現象でもあろう。

街のたたずまいも何時もの朝と違い気温も低く外に出るのも億劫になり、窓から外を眺めると教会の尖塔に雪がちらついているのが目に付いた。

見慣れた景色に降る雪を見ている作者に、いつもとは違う心の変化が生じ、その雪の降り様が作者の心に神の「み言葉」のように見える心に深く印象を留めたのであろう。

雪の降る状態を神の「み言葉」と受け止めた作者の心情が伝わってくる。（静龍）

言葉は言葉でも「み言葉」となると、所謂神の御言葉と解釈出来るだろう。熱心なクリスチャンである作者ならではの存問、というより神への祈りとも受け取れる表現である。チャペルに降る雪はより神秘的であり、作者のみならず読者にも神の存在を信じさせる力のある句である。（廣太郎）（以下略）

天地有情

妻恋ふは女々し女々しと笹鳴ける	相模原	木村享史
笹鳴か変哲さんのハモニカか	同	
見舞ふ人亡き部屋広き冬日かな	神戸	三村純也
七七忌過ぎし落ち着き日脚伸ぶ	同	
菱の実に水饒舌となりゆけり	東京	稲畑廣太郎
菱の実や御嶽山は見えずとも	同	
寒月に白妙の富士峙てり	長岡	安原 葉
寒風に吹き曝さるるものに吾も	同	
雛飾り女子大学に句会あり	東京	今井千鶴子
学長の遺贈の雛を飾る句座	同	
雪嶺となりし六甲早や在らず	樺原	稲岡 長
夫々の想ひ投ぜし焚火かな	同	
ついと来て鶴が御慶述べにけり	熊本	岩岡中正
一山のおのづからなる淑気かな	同	
御降のいつしか星の空となる	東京	河野美奇
最徐行したるに雪の七曲り	同	
ためらひの美しかりし絵踏かな	神戸	後藤立夫
替へられる鸞の気持になつて来る	同	

心子選

殉教の聖徒の像や銀杏散る	福山	竹下陶子
いく戦火浴びし古刹や夕しぐれ	同	
大寒や妻に鬨病吾に看取り	仙台	赤川誓城
悔いのなき看取りに明けし三ヶ日	同	
虎落笛わがふる里の子守唄	神戸	長山あや
闇汁のうまさは闇の深さより	同	
贈られし冬虫夏草老の春	同	後藤比奈夫
余生とはゆめ思はじな老の春	同	
節分の豆買ふことを忘れけり	東京	田村 元
見合より六十二年春立ちぬ	同	
生きついで九十年のふぐと汁	徳島	上崎暮潮
もう阿波を出づる気はなし鴨を見る	同	
山の温泉の真夜の厳寒月明り	吹田	宮崎 正
湖のいろ変へゆく比良の雪解川	同	
山寂しからんとかかる冬の虹	箕面	井上浩一郎
川合うてふくらむ瀬音春を待つ	同	
初富士は見ず大西日見て帰る	熱海	嶋田一步
羽子をつく真白き富士のありにけり	同	

# 天地有情句評

汀子

寒月に白妙の富士峙てり  
長岡 安原 葉

最高の富士山の姿との出会い。

雛飾り女子大学に句会あり  
東京 今井千鶴子

懐かしさ。

妻恋ふは女々し女々しと笹鳴ける  
相模原 木村享史

雪嶺となりし六甲早や在らず  
樺原 稲岡 長

恋女房を悼む哀しみ。

温暖な地に積もる雪嶺のはかなさ。

見舞ふ人亡き部屋広き冬日かな  
神戸 三村純也

一山のおのづからなる淑気かな  
熊本 岩岡中正

せめて見舞えた日々の喜びを懐かしむ。

改る新年の心に仰ぐ山。

菱の実に水饒舌になりゆけり  
東京 稲畑廣太郎

御降のいつしか星の空となる  
東京 河野美奇

菱の実の命を見た。

正月の雨の上った夜の星空へ改る心。

(以下略)